

江戸上りの旅と墓碑銘

MAEHIRA, Fusaaki / 真栄平, 房昭

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

97

(発行年 / Year)

1995-02-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002755>

江戸上りの旅と墓碑銘

真栄平 房 昭

はじめに

周知のように、幕藩制下における琉球使節の参府は「江戸上り」とも呼ばれ、徳川將軍の代替りを祝う慶賀使と琉球国王の即位を謝恩するための謝恩使を合わせて約十八回の派遣を数えた。その主要な研究史を概観すると、横山學『琉球国使節渡来の研究』（吉川弘文館、一九八七年）は、関係史料の博搜と綿密な考証により各年度の使節団構成を確定し、幕府や薩摩藩の対応、江戸期の琉球認識などについて詳細に論じた。紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』（校倉書房、一九九〇年）は、東アジアにおける幕藩制国家の成立と対外政策との関わりを重視する視点から、幕・薩・琉三者の権力構造の中

で形成された琉球使節の江戸上りの成立から解体にいたる歴史的特質を解明した。また、宮城栄昌『琉球使者の江戸上り』（第一書房、一九八二年）は、使者の派遣準備から詩歌・芸能など文化交流の方面にも論及した点に大きな特徴がある。

琉球使節の江戸上りは、幕府から「異国」の使者として位置づけられ、朝鮮通信使やオランダ商館長の参府とともに幕府外交の一環をなしていた。それが一般の大名・旗本の参勤交代と異なる特徴点としては、①琉球国王が直接参府しないこと、②参府の時期が將軍代替りや國王即位といった特別な場合に限られること、③薩摩藩主の先導で執り行われたことなどが指摘されている（一）。

今後さらに研究を深めていくべき課題として、未開拓の琉球史料である尚家文書の解明をはじめ、島津家文書や諸藩の新たな史料発掘などが期待される。また、全国的にみると、江戸・東海道地域に比べて、上方・山陽道方面における琉球使節の実証研究が少ないという問題も残されている。以下、本稿では、淀川水系の交通路の問題や、瀬戸内海に面する福山藩領の港町・鞆津（もも）の事例を中心に考察してみたい。

一 淀川水運と琉球使節

寛政二年（一七九〇年）六月六日、徳川家斉の將軍就任を祝う慶賀使節団が琉球を出帆した。正使宜野湾王子がひきいる総勢九六名の使節団である。南国の初夏の太陽がまぶしい季節に琉球を旅立つ

た一行は、半年近くに及ぶ長旅をへて、寒風が吹きはじめる十一月下旬、ようやく江戸に到着した。

この長旅の途次、宜野湾王子が詠じた和歌に、

かきりなき、山をいくえかなかめきて、それそとしるき、雪のふしのね

とある。南から北へ日本列島を縦断するかたちで、はるか幾山河を越えて来た琉球使節の旅の感慨が伝わってくる一首である。使節一行は江戸到着後、十二月二日に登城し、將軍家斉と謁見したことが『通航一覽』や『琉球人行粧記』等の関係史料によって確認できる。

江戸上りの旅程について見ると、鹿児島から大坂までの一般的コースとしては、鹿児島から陸路で伊集院―市来などをへて、川内河口の久見崎から海路に出る。天草―牛深―平戸など九州西岸の港をへて瀬戸内海に入り、下関―御手洗―鞆―牛窓―鞆島（直島）―播州室津―明石―兵庫などの主な港に寄港したのち、大坂の木津川河口に至る。淀川に入ると、接待役の諸大名が準備した「御座船」に乗りかえて「船行列」を組み、京都の伏見までさかのぼった。

この船行列に必要な物資や労働力の調達は、幕府が諸大名に負担を命じた。淀川、木津川など畿内河川交通を支配する大坂町奉行および川口船奉行から、小倉、平戸、熊本など諸藩の大坂留守居役に對し、船行列の実施について詳細な指示が下され、屋形船・供船・馬船・川御座船・三十石船など大小あわせて三十二艘の船団が用意されたほか、上り船の綱を引く「船引人足」も五十二名が動員された（二）。『旧琉球藩評定所書類目録』に、「琉球人参府二付川行列、但木津川ヨリ大坂御屋敷迄并伏

見川上り」(第一四〇号)という史料名が確認される。

淀川を舞台に展開される珍しい異国風の水の上パレード「船行列」を一目見ようと、大勢の見物人が集まった。大坂の町人学者として有名な木村兼葭堂なども、こうした「琉人川登見物」に大きな関心を寄せており⁽³⁾、また町医者の見聞録『浮世の有様』では、次のように記している⁽⁴⁾。

(十月)十一日、琉球人来朝し、薩州の屋鋪へ着船。同十五日朝乗船にて今夕枚方泊のよし、両日共見物群をなし、仰山の事なり。茶船・上荷・三十石に至る迄、船一艘もなし。何れも八月頃より船を借れる約束なせしことなりといへり。大勢の見物の中には、御法度に背き、美服を着せし者有之し由にて、大勢召捕へられ、騒々敷事なりし。

右によれば、「琉球人来朝」の二カ月も前から、淀川の借船はすべて予約済になるほど人気が高かった様子である。江戸時代の人々にとって、この種の「異人行列」を見ることは「異国」という抽象的な存在を身近に実感できる数少ない機会であり、それだけに関心も高かったのであろう。ある文人は大坂に逗留中、天保三(一八三二)年の琉球船行列を見たときの感動を漢詩に詠んでいる⁽⁵⁾。その一部を紹介すると、

請看今日発浪花、樓船整艦遡澱河、河浜清掃沙敷玉、長流直上水起波、百丈挽船揚柳岸、大船小舟幾数多、副使親方團紅幕、便船厨舫旅輕紗、川心悠悠鱸獎静、王子樓船最榮華、(云々)

という。大坂を出発した大小の船団が「澱河」(淀川)をさかのぼる光景である。副使親方の乗船に

は紅色の幕を張りめぐらし、正使の王子は華麗な楼船(屋形船)に乗った。なお正使の船には「大坂船問屋」の者が乗りこんで水先案内役をつとめたようである⁽⁶⁾。琉球人行列図はこれまで各種の作品が知られているが、近年発見された嘉永三年の「琉球人来朝行列之図」(辛基秀氏所蔵、縦六十四・一、横九十六・九^{cm})は、彩色一枚物の上中下三段に琉球使節および警固役の薩摩藩武士ら約百人の行列の様子が描かれている。

二 大坂―京都間の交通

大坂―京都間における琉球使節の旅は、淀川の水上交通が主に利用された。ここでは、淀川沿いの代表的な宿駅であった枚方^{ひらた}と伏見の事例をとりあげたい。枚方(大阪府枚方市)の繁栄ぶりについて、近世の『淀川兩岸一覽』は次のように記している⁽⁷⁾。

この駅は京師・浪花の通路のうへ、西国の諸侯方関東参勤の官道なるがゆえに、旅舎・本陣・茶店・貨売屋多く、はた飯盛の女などありて、昼夜ともに賑わしく駅中、泥町・三矢・岡・新町の小名ありて、町続きすこぶる長く、至つての繁花なり。(中略)貨売船は当所の名物にして、夜となく昼となくささやかなる船に、飯・酒・汁・餅などを貯へ、上り下りの通船を目がけて、鍵やうの物をその船に打ちかけ、荒らかに苦引きあげ、眠りがちなる船客を起こして声かまびすしく酒食を商ふ。俗にこれを喰らわんか船と号す。

街道には旅舎・本陣・茶店が軒をつらね、名物の煮売船が淀川を往来する三十石船に滞ぎ寄せ、乗客に酒や食物などを売りつけたのである。このような淀の川舟に乗った日本人女性と、琉球使節との交流を物語る一例として、「淀の舟にて女に物を贈る」という場面で、琉球人の東風平里之子が詠んだ歌が嘉永三年の『中山国使略』にみえる。

ぬしやたれ、うき名たつとも唐たきの、
けふりくらふることもあらハヤ。

こうして、枚方宿から淀川をさかのぼった一行は終着点の伏見で船を下りた。三方を山に囲まれた京都盆地の南の玄関口・伏見は、古くから京都と大坂を結ぶ交通の要衝として栄え、江戸時代には三十石船が淀川を往来し、旅客や物資が集散する経済の中心地としてにぎわった。昼・夜二回、定期船が伏見と大坂三軒茶屋の間を往復し、上り舟は綱をつけて引きあげたという(8)。

かつて薩摩藩の蔵屋敷があった伏見には、幕末の志士坂本龍馬で有名な旅籠・寺田屋や、昔ながらの酒蔵などがいまでも残る。宝永七年伏見で宿泊した琉球使節の榮童子南風原里之子は、当時、流行の「浄瑠璃」を見物している(9)。翌年、伏見の薩摩藩邸に滞在中の美里王子・豊見城王子は、新井白石と対談した(10)。潮平親雲上の体験談をまとめた『大島筆記』によると、「伏見にて王城の地を遙拝し奉りたる」(11)という。王城の地とは、前後の文脈から推定して京都であろう。なお、伏見の本陣で病死して大黒寺に葬られた琉球人に、天保三年の儀衛正儀間親雲上(蔡修)がいる(12)。

三 異国人行列と民衆

伏見の町は、琉球使節の到来を待ちうける大勢の見物人であふれ、にぎやかな路次楽の行列が目を集めた。『旧琉球藩評定所書類目録』にみえる「伏見御飯屋へ琉球人為参府伺御機嫌参上行列帳」(第一三三三号)、「琉球人伏見東浜船卸ヨリ本邸マテ行列」(第一四四〇号)といった文書は、いずれも伏見における琉球人行列の関係史料であろう。

平戸藩主松浦静山の『保辰旅聘録』によると、「伏見の市中は、かねて待設けたることなれば、家々に棧舗をかけ、紅氈紫幕、金屏風など壯観」であったと記される。これと同じように江戸でも、

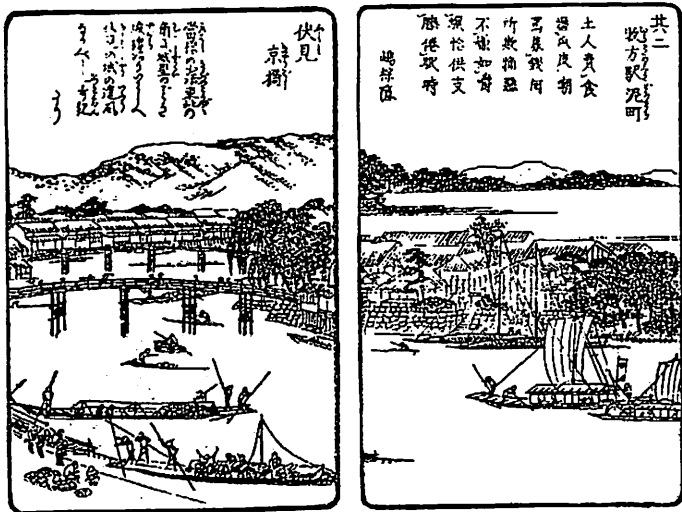


図1 『淀川兩岸一覽』にみる枚方・伏見

琉球人行列が通る沿道に多数の見物人が群がり、いわゆる琉球ブームが沸き起った。たとえば、日本橋を過ぎた田町一丁目あたりでは、道の左右の人家に幕を廻らし、その後に屏風をたて、店の前には毛氈を掛け、「路傍も皆手すりを構へ、見物の人群居」して、琉球使節の到着を待ちかまえた。沿道を埋めた人々の熱気は、「殊に壯観なること、恒例の山王神田祭より、増るとも劣るべからず」と、松浦静山は観察している⁽¹³⁾。

江戸における琉球使節の「行列」は、將軍拝謁の登城・下城の日のみならず、將軍家の靈廟がある上野寛永寺の東照宮参拜でも華々しく挙行され、沿道に集まった大勢の人々の熱い視線が注がれた。こうした異国人の行列はたんに珍しい見世物というだけでなく、徳川幕府の「御威光」を民衆の視覚に訴える政治的效果を発揮したという意味で、本質的には巧妙な国家儀礼としての性格をもっていた⁽¹⁴⁾。

こうした「異国ブーム」をまき起こした琉球使節および朝鮮通信使の渡来は、江戸時代をつうじて約三十回を数えた。「異国行列」は、九州から江戸までを往復する街道に群がる見物人の眼を楽しませながら、幕府の「御威光」が海外まで輝いていることを人びとに強く印象づけたのである⁽¹⁵⁾。その「行列」は民衆の眼からみれば、異国情緒あふれる珍しいイベントであり、幕府にとっては、民衆の素朴な好奇心を巧みに利用しながら、みずからの「威光」を高める機会であった。つまり、幕府は異国の使節を江戸に迎えることにより、自らの権威を内外に誇示したのである。

幕府は、琉球・朝鮮両国の使節を迎えるにあたって、これを日本の華夷秩序を示す国家的行事として、広く士民に印象づけようとした。その来聘に伴う巨額の費用が「国役」によって徴収された点に注目する山口啓二氏は、国役普請や日光社参寄人馬などの役負担と同様に、琉球人国役を「天下」の「お百姓」意識を鼓吹した幕府の政策構造の一環とみる⁽¹⁶⁾。

朝鮮通信使の送迎については、従来、沿道諸国の大名が人馬を供出したが、享保四（一七一九）年からは請負の通し人馬によってこれを調達し、その費用が享保六年に東海道十六カ国の農民から高石当り金三分余の国役金として徴収された。琉球使節の場合をみると、幕府は近江・美濃・三河・遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵の八カ国の幕領と私領一円に人馬継立役を課し、天保四（一八三三）年から国役金（高百石当り永二百五十文）を徴収するようになった⁽¹⁷⁾。この点について紙屋敦之氏は、朝鮮通信使の易地聘礼（一八一一年）との関連を示唆し、通信使がそれまで果たしてきた国家儀礼を琉球使節が肩代りさせられたものと理解する⁽¹⁸⁾。

幕府は、外国使節の来聘に伴う費用を国役として民衆に転嫁する一方、朝鮮・琉球の使節団を江戸まで先導する対馬・薩摩の両藩に財政援助を続けた。すなわち、薩摩藩では江戸上りや災害等による財政難を理由に幕府から多額の「拝借金」を引き出し、一七九四（寛政六）年に米一萬石、金二万両の拝借を許されて以降、それが慣例化していったのである⁽¹⁹⁾。

こうした幕府の外交体制を基底で支えた国役の問題については、沿道諸国の郷村レベルの役負担の

実態を比較しながら、今後さらに解明される必要があろう。

四 江戸上りの琉球人墓碑

江戸上りの旅は、南国育ちの琉球人にとって不慣れな冬の寒さや長旅の疲れなどから、途中で思わぬ病に倒れる者が少なくなく、ついに「死」にいたる不幸な例もあった。現存する文献史料や墓碑銘などから管見の範囲で確認できる琉球使節の死亡例について、その人名・没年・死亡地・埋葬寺などを年次順に示したが、次の表1である(20)。

表1 〈琉球使節墓碑銘一覽表〉

No.	人名	没年	死亡地・埋葬寺
1	具志頭王子尚宏	慶長十五年(一六一〇)	静岡県清水市興津清見寺町・清見寺
2	仲西筑登之(燕姓)	宝永七年(一七一〇)	静岡県浜松市西鴨江町・西見寺
3	宮城親雲上(白氏)	明和一年(一七六四)	兵庫県神戸市兵庫区・真光寺
4	与世山親雲上向道亨	寛政二年(一七九〇)	広島県福山市鞆・小松寺
5	比嘉親雲上	文化三年(一八〇六)	東京都港区芝・大円寺
6	儀間親雲上蔡修	天保三年(一八三二)	京都市伏見区・大黒寺
7	富山親雲上梁文弼	天保三年(一八三二)	名古屋市緑区鳴海・瑞泉寺
8	高嶺里之子親雲上	嘉永三年(一八五〇)	静岡県浜松市西鴨江町・西見寺

No.1の具志頭王子尚宏は琉球国王尚寧の弟にあたり、慶長十五年に駿府の家康のもとへ派遣された際に病死したケースである。その墓が清見寺に現存する。これらの事例以外に、江戸における島津氏の菩提所であった大円寺や、鹿児島における琉球人の菩提所であった光明寺にも琉球人の墓が造営されたといわれるが、現時点では確認できない。

本稿では、江戸上りで死亡した琉球人に関するケース・スタディとして、表のNo.4の与世山親雲上に焦点を絞って考察を進めていきたい。

与世山親雲上(向道亨)は、將軍家斉の就任を祝う寛政二(一七九〇)年の慶賀使節団に「薬師」として参加した。六月六日に那覇を出帆し、十四日に鹿児島着、さらに江戸上りの旅を続ける途中で不慮の病に倒れ、瀬戸内海航路のほぼ中央に位置する備後地方の鞆の浦(広島県福山市)で客死した。享年二十二歳。琉球から遠い異郷の旅路で、青雲の志なかにして命運尽きたのである。

与世山親雲上の遺骸は、鞆の浦の小松寺(臨済宗妙心寺派)に埋葬された。『旧琉球藩評定所書類目録』の中に、「於備後鞆与世山親雲上死去一卷」(第七百五十九号)という文書の標題がみえる。おそらく、その死をめぐる詳しい事情が記されていた文書だと思われるが、残念ながら現存しない。

そこで、鞆の浦を領した福山藩の史料を手がかりに問題を探ってみよう。福山藩の家老をつとめた内藤家文書によると、「琉球人鞆津ニテ病死、同所小松寺ニ葬ル。石牌仰付ラレ、銘山室如斎所撰」と記している(21)。また、菅茶山の編纂した『福山志料』にも、「与世山向道亨 道亨ハ琉球貢使王

子某カ従者ノ一也。舟中ニ病死セシヲ小松寺ニ葬ル。シルシノ石モナカリシヲ 藩先公憐ミテ石ヲ立、儒臣山室如斉ニ命シテ其由ヲ書セシム」とある⁽²³⁾。すなわち、琉球の若者の死を不憫に思った福山藩主(阿部正倫)が追悼碑を建て、藩儒の山室如斉に命じてその由来を起草せしめたのである。

ところで、亡くなった与世山は「楽師」職をつとめていた。これは江戸城や薩摩藩邸での外交儀礼に欠かせない奏楽の指導者で、楽童子に舞楽を教授し、それを將軍・老中・諸大名の前で披露する重要な役目であった。王府の上級官人の子弟から四、五名が楽師に選ばれ、将来を囑望されたエリートコースの一つであった。寛政二年の楽師の顔ぶれは、与世山親雲上のほかに新川親雲上、上原親雲上、玉城親雲上、伊江親雲上ら四名。このうち伊江親雲上朝安(向承訓)は、有名な三司官伊江朝睦の息子で、のちに朝安もまた三司官となっている。

寛政二年九月刊行の『琉球人大行列記』には、五名の楽師があげられているが、その中に「与世山親雲上」の名が確認できる⁽²⁴⁾。寛政二年十月十三日に与世山は世を去ったが、その約一カ月前、『琉球人大行列記』は京都ですでに刊行されていた。したがって、本人が死去した後も、その名前だけは行列記の世界で生き続けていたわけである。

ところで、琉球使節の鞆の浦への寄港については、地元で漢方薬酒を生産・販売していた中村家の文書⁽²⁵⁾に、次のような記事がみえる。

十月十三日夜、参府之琉球人石井町沖江滞船、薩州問屋猫屋清助方江上陸。尤琉球人老人病死いた

し候ニ付、翌十四日早朝小松寺江琉球人参詣土葬ニ取置候。

ここに登場する「薩州問屋猫屋」は、海産物などを扱う御用商人であった。薩摩との取引関係から琉球使節に宿所を提供したのである⁽²⁶⁾。また、猫屋は小松寺の有力な檀家であったという事情から、与世山親雲上の遺骸が小松寺に埋葬されたものと思われる。ちなみに中村家の屋号は「保命酒屋」といい、その屋敷があったという港の中央部には、荷揚げ場や常夜灯が二百年の昔のままで残っている。鞆の港は古くから瀬戸内海交通の要衝として知られ、近世初期にはイギリス商館の定宿も置かれていた。元和二(一六一六)年にイギリス人は鞆の定宿の女主人から鉄の延べ板などを購入し、これをシャムへ送ると述べている⁽²⁷⁾。また、鞆は風光明媚な土地柄でも知られ、江戸時代には朝鮮通信使が停泊した。通信使の高官が泊まった福善寺の客殿「対潮楼」から望む内海の景色は実に素晴らしく、正徳元(一七一二)年に来日した従事官の李邦彦は、「日東第一景勝」と絶賛している。福善寺には通信使の遺墨や扁額などが数多く残されている⁽²⁸⁾。

一八世紀頃の鞆の港のにぎわいについて、享保四(一七一九)年に来日した朝鮮通信使の申維翰による紀行文『海游録』は、

瓦葺きの屋根や市肆が簇々として寸隙なく、見物の男女は、錦衣を着て、東西に満ちあふれている。そのなかには、商客、倡娥(あそびめ)、富人の茶屋も多く、各州からきた使官が往来し、住舎も繁華にして目に溢れるばかり。これまた赤間関(下関)以東の一都会である。

図2 瀬戸内海航路

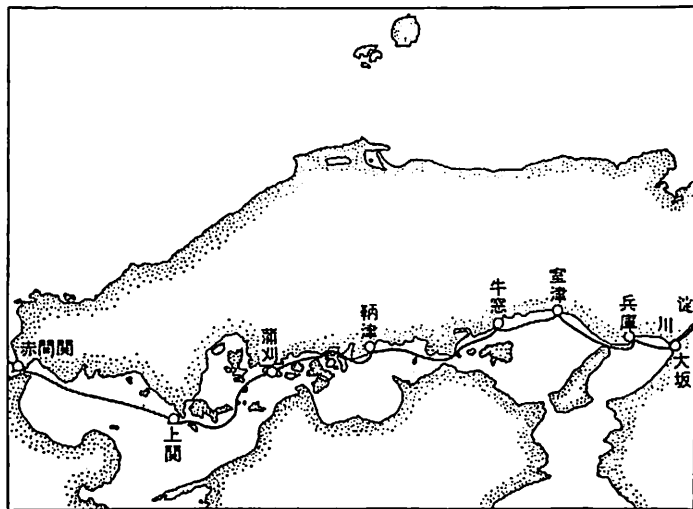


図3 琉球伝来の馬額



と記している(27)。

このように、「赤間関以東の一都会」と称された鞆の港は、西廻り航路の北前船などが数多く寄港する中継商業の拠点であった。ところで、鞆の名産として「保命酒」が有名である。この薬用酒は鞆港に出入りする諸国廻船によって全国に積み出され、オランダ・琉球使節も鞆に寄港した際に、保命酒を買い求めた。保命酒屋(中村家)の文化十年の記録によると、「私家之儀は御当国御上様より厚以御仁恵、数代銘酒家業相続いたし、諸国は勿論、阿蘭陀人・琉球人江も銘酒売弘め」たことが記されている。さらに弘化五年の記録には、「蘭人・琉球人など入津之節も数多買入に相成候義も度々有之、近来は対馬・長崎之筋より少々、異国人の注文も有之、其外諸国名酒取次所も年々軒数相増し」たとあり、保命酒の評判は国内はもとより、異国にも聞こえていたことがわかる(28)。

朝鮮通信使の一員として来日した嚴樓はその漢詩の中で、「船で何百里とやって来たのも、なんのためかといえば、この酒を味わうために、はるばるとやって来たのだ」と、保命酒の美味を称賛したという(29)。長崎へ赴く旅の途中で鞆に寄港した司馬江漢も、その紀行文に「保命酒の名物あり」と記している(30)。鞆に寄港した琉球人たちも保命酒を飲み交わし、江戸上りの長旅の疲れをいやしたことであろう。

一九九四年の夏、与世山親雲上が亡くなった柄の浦の現地を訪れる機会があった。まず小松寺（竊町後地一・二・三番地）を訪ね、坂野宗達氏のご好意により、琉球伝来の扁額を拝見した。本堂の正面に掲げられた扁額の寸法は、縦五十五・五、横百二十三、厚四cm。黒漆の縁に金泥で唐草文様を描き、朱塗の下地に金彫の文字で、「容顔如見」と大書されている（図3参照）。その左右に、「寛政丙辰、譜久山親方朝紀、亡孫、為幽岸曹源寄立」と記されている。丙辰年は寛政八（一七九六）年、故人のちよとど七回忌の年にあたる。すなわち、与世山の祖父にあたる譜久山親方朝紀（のちに三司官となる人物）が、遠く異郷の地に眠る愛孫の霊を弔うために、右の扁額を作製して寛政八年の江戸上り使節団に託し、小松寺に奉納したものである（註1）。

二百年の星霜を経た琉球伝来の扁額を見ると、江戸上りの旅で肉親を亡くした人間の悲しみと情念が伝わってくる。なお、故与世山親雲上の墓前に捧げられた祖父の祭文が、『福山志料』に収められている（註2）。

「維、寛政八歳、歲次丙辰、夏五月十九日甲子、老祖父譜久山親方朝紀、遠く奠儀を具えて、亡孫、幽岸曹源居士の靈を寄祭す。嗚呼、哀しい哉、汝は是れ弱冠にして身は行役に有り、年まさに富みて難を憚らず、まさに其の綉衣袂を分かつにあたりては、漫りに錦を衣て栄旋をねがう。たれか思わん一別の後、遂に永訣を成すと。瘴癘起りて汝が患と為る。汝、館を他郷に捐てて永く幽明を隔つと思わんや。なんじいま、容貌顔色その身傍りに在るを見るが如し。中心痛悼して情を忘る能わず（下略）。

この祭文の内容には、愛孫の早すぎた死を悲しみ、その生前の面影を追想する祖父の哀切な心情があふれている。

ところで、江戸後期の有名な戯作者で、幕府の役人でもあった大田南畝（蜀山人）は、琉球使節に並々ならぬ関心を示している。南畝の随筆『一話一言』（註3）には、使節の職名・人名リストのほかに、故与世山親雲上の墓石の図面と寸法、墓碑銘などが詳しく記録されている。（図4）

これによると、墓碑の形態は三層の台座の上に高さ二尺・横幅六寸七分の長方形。碑の表に「琉球 尚氏与世山親雲上法号 幽岸曹源禪定門之墓」の銘文、裏の銘文末尾には「琉球国同僚泣血拝志」の文字がみえる。小松寺の過去帳に「金五両、祠堂入」と記されることから、故与世山の同僚有志らが供養料として五両の大金を寺に納めたものと考えられる。墓碑銘の読み下しは、大略次のようである。

○与世山親雲上墓銘

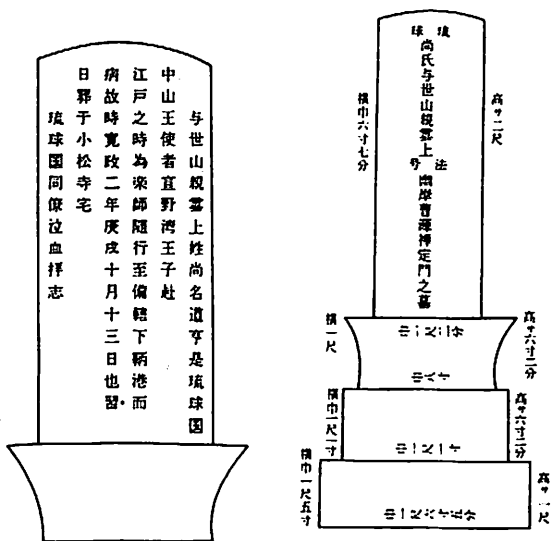


図4（大田南畝『一話一言』巻九）

与世山親雲上、姓は尚、名は道亨。是、琉球国中山王使者宜野灣王子が江戸に赴くの時、楽師として随行し、備後国の管轄下の鞆港に至り、病故す。時に寛政二年庚戌十月十三日也。翌日小松寺に葬りて宅す。琉球国同僚、泣血して志を揮す」（原漢文）。中国の冊封を受けて正朔を奉じた琉球では、墓碑にも中国年号を用いるのがふつうだが、この場合は日本国内で亡くなったので日本年号の「寛政」が用いられている。同時代に中国で亡くなった琉球人の墓はすべて中国年号であるという事実を考え合わせると、唐旅、大和旅で客死した琉球人墓碑にはそれぞれ死没国の年号が採用され、中国と日本の年号を、いわば「属地主義」的に使い分けたことがわかる。

五 琉球人による墓前供養

江戸上りの使命を無事に果たした琉球使節は、寛政三年正月に鞆へ寄港し、小松寺に眠る与世山の墓前に香華を供えた。同僚であった毛廷柱（兼本親雲上）が詠んだ哀悼詩が、『福山志料』に収められている。

恭輓 向道亨与世山學長兄 毛廷柱拜具 恭しく、向道亨与世山學長兄を輓む。毛廷柱、拜具。
並筋同趣萬里邊 筋を並べてともに万里の辺におもむく、

誰知一旦逝黄泉 誰か知らん一旦黄泉に逝くとは、
幽明自是長相訣 幽明是れより長く相訣る、

胸次凄々淚滴然

胸中凄々として、涙滴然たり。

小松寺への墓参は、その後も何度か行われたようである。寛政九（一七九七）年の使節は、江戸からの帰りにわざわざ鞆で上陸し、小松寺に参拝している。「中村家日記」寛政九年の記事によると、「二月三日夜、琉球人着船。翌四日早朝小松寺江仏参、夫より直ニ乗舟出帆いたし候」とある（34）。また、天保三年の『儀衛正日記』には、次のような記載がみえる（35）。

史料① 正月十九日条

鞆着船之上、故与世山親雲上墓所焼香有之候間、被参候方は只今此方江名面書付可被相渡候、左候而彼所着之上は、銘々中官香二把宛藏方江可被差出候、此段致通達候、以上、

但

一、讚議官以下之目録は此方ニ而相調させ可申候、
一、焼香之時装束之儀、役々は琉冠服 案童子紗綾金花之簪差、其外士供は色衣大帯着用有之候様可相心得候、此段も前廉致通達候、

正月十九日 小椽親雲上

儀衛正

史料② 二月二日条

鞆着之上は、故与世山親雲上墓所致焼香候段は兼而及御届候處、彼津通船之砌、御家老御乗船過行

候付、則御用違樺山殿を以手間より御家老座書役衆へ被相伺候處、追風吹統候付ては、一刻も早
 走行候様無之候て不叶、勿論焼香一件も格別ながら、私成儀ニ候得者、私を以て公務相滞候筋に
 は難被仰付無御吟味有之、無是非通船被仰付候、

右の史料によれば、琉球使節は鞆に到着する約二週間前から故与世山親雲上の「墓所焼香」を予定
 し、焼香の際に着用すべき衣装の種類までも細かく指示するなど、入念な準備を進めていた。これは
 あらかじめ薩摩藩に届け出ていたにもかかわらず、藩家老の乗船は鞆に寄港せずに沖を通り過ぎた。

あわてた琉球側が「御家老座書役衆」に伺いをたてたところ、追風が吹いているので一刻も早く帰路
 を急ぐべしという回答であった。すなわち、琉球人の墓参計画は、早期帰国を優先する薩摩藩の意向
 で中止されたのである。藩は、琉球人の不満を解消するため、「着船場より都合次第名代を以焼香為
 致候か、又は館内着之上差遣候筋ニ成共程能取計、いつれ琉人共到着候様可申達旨承知仕候事」と、
 着船場から「名代」を鞆へ遣して焼香するか、あるいは琉球館到着後にするか、いずれにしる琉球人
 が納得する方向で対応するという意向を示した。結局、琉球使節は鞆への寄港を断念せざるを得ず、
 二月三日、広島藩領の御手洗に入港した。

それから十年後、天保十三（一八四二）年の江戸上りの際、慶賀使浦添王子朝熾に随行した楽師の
 牧志里之子親雲上（魏学源）が、鞆の小松寺を訪れて、追悼の詩を詠んでいる。

鞆浦詩感 魏学源

古寺嵐煙樹色朦

古寺の嵐煙樹、色朦なり、

鐘声到艦停客蓬

鐘声艦に到りて客、蓬を停む、

一番忽触傷心事

一番忽ち触る傷心事、

聞説球人埋此中

聞説す、球人、此の中に埋まると。

おわりに

以上、江戸上りの旅で客死した琉球人について、備後鞆の浦の事例を中心に検討してきた。

福山藩主が建立せしめた与世山親雲上の追悼碑は、二百年の風雪に耐えて小松寺の境内に現存する。

「瑠球司樂向生碑」と彫られた立派な石碑で、本堂の左手にある。住職の話によると、戦後、墓域の
 改修工事の際に、石碑を本来の場所からやや下手に移したらしい。墓そのものは寺に残っていない。

明治三十年に沖繩の子孫が寺を訪れた際、遺骨と一緒に墓石も持ち帰ったのではないかという。寺の
 過去帳には、「明治三十年三月二十八日曾孫善平朝昌、森山朝頼来リ改葬ス」と記されている。

琉球からはるか数千キロも離れた中国大陸や日本へ使者として赴くことが、「旅役」として義務づ
 けられた琉球人たちにとって、異郷で「死」を迎えた先人や身近な同僚の運命は、決して他人ごとで
 はなかった。航海中の漂流や難破の危険が大きかった当時、自分もまた旅の途中で死ぬかもしれない、
 という悲痛な想いが強い連帯感を生み、仲間の死を悼む「琉球国同僚泣血拝志」という墓碑銘に深く

刻み込まれている。江戸上りの旅において、琉球人の墓参りが重要な意義をもっていた事情がそこに読みとれよう。

琉球の海外交流史の全体像を理解するためには、大和旅や唐旅において客死した人々の問題を避けて通ることができない。こうした旅で亡くなった人間たちの埋もれた歴史を掘り起こす試みは、中国への唐旅などにも視野を広げながら今後さらに続けていきたい。

注

- (1) 丸山雍成「日本近世交通史の研究」(吉川弘文館、一九九一年)五三一―五三九頁。
- (2) 小倉藩小笠原文庫「薩州様琉球人被召列伏見川御登御行列」、「琉球人来聘控」(福岡県立豊津高等学校育徳館所蔵)。また、大阪府立図書館所蔵菊屋町文書中の「琉球人来朝川合より船行列写」は、嘉永三年の琉球使節の船行列に関する史料である。菊屋町は現在の大阪市南区心斎橋筋二丁目あたりで、江戸時代に商家が多く軒を連ねた。
- (3) 『兼霞堂日記』寛政八年十一月五日条。
- (4) 「浮世の有様」巻九(『日本庶民生活史料集成』第十一巻、三一書房)六六四頁。
- (5) 佐渡山安治「張龍山と琉球使長歌」(『伝記』九巻二号)。
- (6) 「天保三年 儀衛正日記」(『東京大学史料編纂所蔵』)。
- (7) 「淀川兩岸一覽」(『日本名所風俗図会』第十一巻、角川書店)。
- (8) 日野照正編「近世淀川水運史料集」(同朋舎出版、一九八二年)。

- (9) 「阿姓家譜」阿九経。
- (10) 『大日本古記録 新井白石日記下』巻末年譜。
- (11) 「大島証記」(『日本庶民生活史料集成』第一巻、三一書房)三六六頁。
- (12) 「蔡氏家譜」十六世蔡修(『那覇市史』資料編 第一巻6 家譜資料(上)、二六九―二七二頁)。
- (13) 『甲子夜話統篇』巻八十七。
- (14) 真栄平房昭「幕藩制国家の外交儀礼と琉球―東照宮儀礼を中心に―」(『歴史学研究』第六二〇号、一九九一年)。
- (15) ロナルド・トビ「外交の行列・仰列―異国・ご威光・見物人―」(『朝日百科・日本の歴史別冊 歴史を読みなおす17 行列と見世物』朝日新聞社、一九九四年)。琉球使節が往来するたびに、その沿道では屋根の補修や道路の整備を命じられた(『琉球画誌』東洋文庫所蔵)。
- (16) 山口啓二「鎖国と開国」(岩波書店、一九九三年)六八―六九頁。同「日光社参寄人馬についての一考察」(永原慶二・稲垣泰彦・山口啓二編『中世・近世の国家と社会』東京大学出版会、一九八六年)参照。
- (17) 箭内健次編『通航一覽統編』第一巻、四四―四五頁。ちなみに、寛延元(一七四八年)の琉球使節参府の際には、人足六百二十四人・馬百匹の動員が老中より沿道の宿駅に命じられている(『守口市史』史料編 第二巻、二七六頁)。
- (18) 紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』(校倉書房、一九九〇年)二五二―二五四頁。
- (19) 「御触書天保集」下、六六一―五号。荒野泰典『近世日本と東アジア』(東京大学出版会、一九八八年)は、日朝外交の展開と対馬藩の「拝借金」について検討を加えている。
- (20) 死亡事例については、『通航一覽』や『鹿児島県史料 旧記雑録』の関係史料をはじめ、古塚達朗「県外琉球関係金石文について」(沖縄県立博物館編『刻まれた歴史―沖縄の石碑と拓本』、一九九三年)参照。

- (21) 『諸家親』寛政二年中の記事。福山市立福山城博物館の園尾裕氏の御教示による。なお輅の浦関係史料については、以下の調査報告を参照。古塚達朗「琉球人の墓を訪ねて―江戸上りのルートをたどる―」（『地域と文化』七五号、ひるぎ社、一九九三年）、園尾裕「琉球司楽向生碑」とその周辺」（『文化財ふくやま』二七号、福山市文化財協会、一九九二年）。
- (22) 『福山志料』巻二十五、輅津。
- (23) 『江戸期琉球物資料集覧』第四巻、本邦書籍、九七頁。
- (24) 『中村家日記』（『日本都市生活史料集成』七、港町篇Ⅱ、学習研究社）三九〇頁。
- (25) 『日本関係海外史料 イギリス商館長日記』訳文編之上（東京大学出版会、一九七九年）五六一、五八八～五九一頁。
- (26) 姜在彦「朝鮮通信使と輅の浦―両国間文化交流の一餉―」（映像文化協会編『江戸時代の朝鮮通信使』毎日新聞社、一九七九年）、池田一彦「福山藩と朝鮮通信使」（『朝鮮通信使と福山藩港・輅の津、輅の浦歴史民俗資料館編集・発行、一九九〇年』等）。
- (27) 『海游録』（姜在彦訳注、平凡社東洋文庫、一九七四年）一〇〇頁。
- (28) 『中村家日記』（『日本都市生活史料集成』七、港町篇Ⅱ、解題）二六頁。
- (29) 『朝鮮通信使と福山藩港・輅の津』参照。
- (30) 『江漢西遊日記』天明九年一月二十二日条（平凡社東洋文庫、一八一頁）。
- (31) 『中山王府相卿傳職年譜』によると、譜久山親方朝紀（向宏基）の経歴は、乾隆四十三年十二月十九日、五十二歳で三司官に任職し、乾隆五十一年二月十一日、賜紫地浮織冠、嘉慶二年五月七日卒、勤職十年。
- (32) 『福山志料』巻二十五、輅津。
- (33) 内閣文庫所蔵「二話一言」巻九（『日本隨筆大成』別巻二、吉川弘文館）。なお、大田南畝の著作として、

『琉球年代記』（天保三年刊）のほか、文化元年の山陽道紀行として「革命紀行」（西尾市立図書館所蔵）がある。

- (34) 『日本都市生活史料集成』七、港町篇Ⅱ、四〇二頁。
- (35) 『天保三年 儀衛正日記』東京大学史料編纂所蔵。

〈付 記〉

一九九四年夏、輅の浦における現地調査では多くの方々にお世話になった。広島県立歴史博物館の福井照道氏、松崎哲氏、福山市立福山城博物館の園尾裕氏、輅の浦歴史民俗資料館の池田一彦氏、小松寺の坂野宗達氏の皆様に、心から感謝の意を表したい。